

尾藤二洲の思想世界

—— 明末清初思想と武家社会の朱子学のはざま ——

清水 教 好

はじめに

近世社会の成立とともに、氣の思想世界である東アジア儒教文化圏に朱子学、陽明学が成立する。日本においては神儒仏三教一致の思想世界が形成され、そこで外来思想であつた儒教、朱子学・陽明学が多様な展開をみせ、儒学思想史が成立するのである。

西に伊藤仁斎の古義学、東に荻生徂徠の古文辞学と古学が成立し、徂徠学以後は現実への実践的関心を思想的動機として、日本儒教の氣の思想世界の中から、折衷学や懷徳堂学派、重商主義的経世論が登場する。

そのようななか、朱子学は寛政正学派によって「経世済民の学」として再生する。¹⁾

「異学の禁」以降、朱子学は「修己治人」の学として「武家社会」における教化・教育を担つていくこととなるのである。

とはいえ、儒教・儒学思想は総じて道德学に限定され大衆化し、諸思想を折衷しつつも社会思想として拡がりをもせていくこととなるのであつた。

近世日本の儒学思想史の展開を以上のようにとらえたいうえで、ここでは寛政正学派の一人尾藤二洲の思想をとりあげ、その思想世界を論じていきたい。²⁾ 本稿は、晩年に記したとされる『拙言』³⁾を通して、そこに含まれた理と氣の世界を論じる唯一の長文を軸にそれを検討した研究ノートである。

拙言とは善悪を選び取らねばならない言葉をいうが、『拙

言』は「感有れば輒ち記す。初めは素餐と曰い、次は折言と曰う。初めの言は、なお考証する所有り。次は則ち直ちに意の趣く所を写し、修めず飾らず、語次倫無し。扱ひ而して之を取るは、覽る者に在り。」と述べるように、二洲の意の赴くままに修飾を加えることなく展開された百二十二条の語録で構成されている。そこには理気体用その他修養上の説が、日本社会へ適応するための具体的姿を交えて記されているのである。

さて、尾藤二洲は伊予川之江の商家に生まれるも、幼少時の川之江時代をへて大坂へ遊学、その時代に思想を形成する。陽明学↓徂徠学↓朱子学と諸学の選択という思想遍歴によって形成されたが、その寛政期に成立した「日本朱子学」はいかなる特色を持ったのであろうか。

中国における清代の朱子学の展開が朱子学そのものものなる再生産ではなかったように、無視できないのは、明末清初の中国朱子学の動向であり、その西学による変容、そしてそれが日本に及ぼした影響という思想上の問題である。ここでは、従来より注目されることの特になかった方智『物理小識』⁶、游藝『天経或問』⁷の思想上への影響⁸に留意したい。

二洲を含め寛政期の朱子学思想は、従来「異学の禁」における朱子学による思想統制のみが注目され、統制を担った寛政正学派の思想自体は朱子学の単なる再生と捉えられ、特にその思想自体が問題にされることはなかった。

しかし、寛政正学派の朱子学は、徂徠学を否定的媒介として成立した朱子学であった。それは現実を対象とし、現実を反映して形成された朱子学を意味する。「異学の禁」後の「修己治人」、その学問・思想教化の対象は、寛政期の武家社会であったのである。

一 三才一貫―朱子学像の展開

尾藤二洲が学びつつ懐いた「朱子学」は、いかなる特色をもったのであろうか。

或ひと曰く、一動一静、万古此の如し。都ては是れ氣の屈伸往来なり。何會所謂理なるもの有らんや。今乃は氣の上に、更に一物を立つ。是れ何をか説かんや、と。【京儒の言】

曰う。屈伸往来するは気なり。屈伸往来する所以のものは理なり。試みに人事を以てこれを明らむれば、坐する者立つる者は、是れ気なり。坐する所以立つる所以は、是れ理なり。天下理無きの気無く、気無きの理無し。故に理は気の理、気は理の気、二者は必ず相無きこと能わざるなり。

天もし此の理無くんば、すなはち日月は度を失い、寒暑は錯置す。而して日月の運行、一寒一暑は、未だ嘗て相踰えず。此の理の在ること有ればなり。地もし此の理無くんば、すなはち火もまた以て潤すべく、水もまた以て焼くべし。而して水火の用は、未だ嘗て相侵さず。此の理の在ること有ればなり。人もし此の理無くんば、すなはち目もまた以て聴くべく、耳もまた以て視るべし。而して聰明の徳は、未だ嘗て相乱れず。此の理の在ること有ればなり。

唯だ理は虚而して見難く、気は実而して見易し。其の見易きに就いて、以て其の見難きを観る。坐するに就いてこれを観る。坐するの理を見つべし。立つるに就いてこれを観る。立つるの理を見つべし。父子に就き而してこれを観る。以て其の父子を為す所以の理を見る。君臣

に就き而してこれを観る。以て其の君臣を為す所以の理を見る。苟くも能く此に於いてこれを察すれば、すなはち理氣の説は、其れ謬らざるに庶し。然らば見る所深くんば、すなはち理の字重く、見る所浅くんば、すなはち理の字軽し。これを要ふるは神而してこれを明らむるは、其れ人に存するのみ。

もし徒氣を言い、而して理を言わざる者は、すなはち器を知り而して道を知らざる者なり。是れ其の謬りは、理の字を見るになお氣の字のごとく、必ず一物の指すべきものを得、而してこれに充てんと欲するより起る。殊に知らず、理は氣の理、道は器の道、則は物の則、義は事の義。氣や、器や、物や、事や、皆形象の指すべきもの有り。理や、道や、則や、義や、皆形象の指すべきもの無し。唯だ其の指すべきもの無し。故に聖賢はこれを為し名を立て以て人に示す。曰く、仁義礼智。曰く、孝弟忠恕。大小精粗。詳らかに備わらざるもの莫し。今乃は形象の指すべきもの無きを以て而してこれを疑う。是れ衆庶の見にして、また何ぞ利を知り而して義を知らざる者に異ならんか。此の是れ学問の大關鍵にして、最も当に思いを致すべき所なり。

(二三条)

万物を構成する気に対して、理とはいかなるものか、はじめに理の存在する意味が問われる。そして、理とは気の然る所以、気の内容根拠であり、「理は気の理」「気は理の気」と理と気の不可分な関係が、人間社会の事柄に即して問われ説かれていく。

天の世界では、日月の運行、一寒一暑といった自然の秩序が、地の世界では、水と火の果たす作用が、人の世界では、目、耳の正常な機能と対する恩恵が、と天地人三才の気の世界が、理の存在によって保たれているのである。

さらに人の世界における理による気の作用の制御が、その気から見た理気の説として語られていく。行動の理、人間関係上の所以の理が個人から父子、君臣へと及んでいくのである。気の世界の人が、理を認識することの重要性を再認識することが必要であることを説くのである。

元来、修己治人によって形成される儒教の思想世界とは、気によって万物が成立する天・地・人三才の世界であり、そこでは、天の地・人との一体感が、天人合一思想によってあらわされた。

しかし、朱子学では儒教の天・地・人の気の世界が、理によって規定され、理気二元の世界観が説かれる。そこで

理は、それ自身では決して具体的現実的な存在としては現象することなく、気と結合して、気に内在する。世界の一切は理によって秩序づけられるのである。万物はすべて形而上の理と形而下の気の結合によって成立し、理は物の性を決定し、気は物の形を決定したのである。

二 気の世界

三才のうち注目されるのは、「水火の用」があげられた地の世界である。寛政一二（一八〇〇）年に著された『冬讀書余』巻之一には、地に関して次のような論がみられた。

一書は云う。地は既に円かなる形なれば、すなはち処は中に非ざるは無し。所謂東西南北の分は、人の居る所に就いて名を立つるに過ぎず。初めは定準無し、と。余云う。東西南北は、固より人の居る所に就いて名を立つ。然れども処は中に非ざること無くんば、すなはち処は、東西南北無きこと無し。初めは定準無き者の如く、而して随处定準有り。是れ自然の理にして、易う可らざる者なり、と。

(三五条)

ここでの地は、地球をさしている。地球体説は日本に一六世紀には受容され、近世においては「鎖国」以前から知られており、寛政期には天動説ではなく地動説がみられた。地が球体であることは天動説にたつ『天経或問』がそうであつたように、すでに知られていたのである。

注目されるのは、儒学者のする議論の「地」に地球が登場していることである。さらに、地球上の東西南北の方位の名は人の定めたものだが、地球上の場所には必ず存在する。それは一定の標準、地の「定準」であるが、それが「自然の理」であるとされていることである（後述）。

地が地球であることは、儒学者尾藤二洲の思想上にある大きな転換をもたらしたと考えられるのである。それは、儒学でいう華夷思想における華夷の相違が絶対のものではなく、相対的なものであるという現実の問題であつた。

文士、漢を謂いて中国と為す者有り。謂いて華夏と為す者有り。謂いて西夷と為す者有り。其の説如何。曰く、彼れを以て中と為す者は、すなはち我れを以て外と為す者なり。我れ建國より彼れの封を仮りず。自ら紀号有りて、彼れの正朔を奉ぜず。安くんぞ彼れを謂いて中と為

すの理有らんや。其の大なるを以てこれを夏と謂い、其の文なるを以てこれを華と謂うは、是れ彼れの寔なり。我れ困りて呼んで華と曰い夏と曰うは、固より不可無し。自ら國体を存して、其の臣屬を為さずんば可なり。人を稱して其の寔を没すれば、すなはち公平の道に非ざるなり。謂いて西夷と為す者に至りては、是れ神學者流の言、井蛙の唯だ井を知るのみ。必ずしも弁せずして可なり。

(三〇条)

我れよりこれを言う。我れは中にして、彼れは外と。彼れよりこれを言う。彼れは中にして、我れは外と。各々居るところに従いて言を為すは、不可無きなり。中は定体無し。大小の分は易う可らざるがごときに非ず。【中外は猶お中偏のごとし。偏はすなはち外。】(三一条)

華夏はすなはち可、中はすなはち不可とは、何をか謂わん。曰く、華夏は彼れの専らとするところ、中はすなはち天地の公にして、彼れの得て専らとするところに非ず。彼れを以て華と為せば、すなはち我れを以て夷と為さんか。曰く、我れ自ら中と為し、諸國は外と為す。また天地の公なり。漢は既に外にして、外はすなはち夷なり。但し、漢の國を為すは、本より諸國と同じからず。

これを称してこれと呼ぶこと、宜しく斟酌有るべし。概ね夷蛮とは曰うべからず。(三二一条)

新羅・高麗のごときは、漢の属国なり。故に彼れを以て中と為す。契丹・女直のごときは、自ら国を建つ。故に呼びて南朝と為す。而して中とは謂わず。(三三一条)

我れを謂いて東華と為し、彼れを謂いて西夷と為す者有り。華夏の目は、是れ彼れの立つところ。今はすなはち此れを以て反りてこれと呼び、以て国体を得んと為す。何其の心を設くるの公平ならざらんや。(三四一条)

以上にみられる「彼れ」と「我れ」との関係をめぐる議論は、「彼れ」漢の示す華夷思想の論理にはのらず、「我れ」独立国家の立場からする「公平の道」を基軸にしてなされているのである。そこには、西洋に対する地球上における「我れ」の意識が存在すると考えられる。つまり「我れ」の意識に、中華思想の否定(＝中国との差異)を通しての、「国体」の読み出し(＝西洋との差異)が見られるのである。中華思想の否定こそが自国「国体」を、さらには「日本朱子学」を成立させる最も重要な契機とされているのである。さて、このような東アジアから地球規模への世界の拡が

りの下で、地の作用として『扨言』で取り上げられたのが「水火の用」であった。地の世界、つまりは地球上での物の生成・変化は水と火による、とされているのである。

とはいえ、思想形成初期の安永六(一七七七)年に刊行された『素養録』においては「万物は是れ五行の生成。五行は是れ陰陽の変合。陰陽は是れ一気の動静」と、万物生成は陰陽五行に基づく気・質論で説かれていた。

ここには、万物を生成する「質」が五行から水火二行へと、生成場所も天地人三才から地へと変化がみられるのである。

ところで、その水と火の機能を「水火二行」として説いたのは、方以智の『物理小識』であり、遊藝の『天経或問』であった。方以智は、「中国ハ五行ヲ言イ、太西ハ四行ヲ言ウ。将ニ何レヲカ決センヤ。」と問い、

虚ナルハ固ヨリ是レ気、実ナル形モマタ気、凝リテ成ル所ノ者ハ、タダ是レ一気ニシテ兩行交モゴモ濟スノミ。気ヲ以テ言エバ、気凝リテ形ヲ為ス。蘊、発シ光ヲ為シ、蔽、激シ声ヲ為スハ、皆気ナリ。而シテ未ダ凝ラズ、未ダ発セズ、未ダ激セザルノ気ハ尚多シ。故ニ概ネ気・

形・光・声ヲ挙ゲテ四幾ト為ス。

と、形と氣の作用を説き、^⑬同様に游藝は、

五行、世間見ルベキノ五材ニ因リテ、隠カニ其ノ五氣ノ行ヲ表シテ以テコレヲ五ト謂ウナリ。然シテ氣、其ノ氣ヲ分ケテ以テ凝リテ形ヲ為ス。而シテ形ト氣ト對待ト為ス。是レコレヲ一ニシテニヲ用イルナリ。土ノ形ハ中ニ居テ水火ニ行ハ実ニ燥濕ノ二氣ト為ス。金木ノ形ハ地ニ因リテ出ヅ。金ハスナハチ地中ノ堅氣。木ハスナハチ地外ノ生氣。然シテ其ノ氣為ルヤ、東西ニ列シテ以テ生殺ヲ為ス。故ニ南北ノ水火ヲ挙ゲテ東西ノ木金寓ス。以テ水火ノ對待ヲ為スニアラズ。是レ天地ノ氣ハ必ズコレヲ水火ニ原ヅク。水ノ用ハ実ニ重クシテ火ノ用ハ最モ神ナリ。【細註略】一而シテ氣、火ヲ蘊メテ軛動スルトキハスナハチ風ト為リ、吹キ急グトキハスナハチ声ト為リ、聚発スルトキハ則チ光ト為リ、合シテ凝ルトキハスナハチ形ト為ル。是レ風・声・光・形ハ、總テ氣ノ用為リ。氣ニアラザルコト無シ。故ニ西國ハ金木ヲ捨テテ専ラ氣ヲ言イテ水火土ト並ビ挙ゲル者ハ、其ノイマダ凝形セザ

ルノ氣ヲ指シテ、以テ天地万物ノ生成ノ機ト為ス。スナハチ五材ノ形ナリ。五行ノ氣、顧ウニ生剋ヲ以テ至理ト為スベカラズ。(中略) 水火ハ一ナリ。其ノ質ヲ論スレバスナハチ相剋シ、其ノ氣ヲ論ズレバスナハチ相生ズ。其ノ形氣ノ交ヲ論ズルトキハスナハチ又相入ル。火ハ水ヲ見テ死スレドモ而シテ温泉ノ沸湯ハスナハチ火ノ氣、能ク水ノ形ニ入ル。水ハ火ヲ見テ散スレドモ而シテ燈脂燭蠟ス、スナハチ水ノ氣、能ク火ノ形ニ入ル。夫レ水ハ氣ニ化シテ火ト為リ、火ハ氣ニ化シテ水ト為ルトキハスナハチ水火互イニ相生ジ變化シテ以テ道為ルナリ。是レニシテ、コレニ居ルコト一ナリ。然シテ氣ニ就イテ以テ物ノ質理ニ格リ、其ノ氣ヲ為ス所以ノ者ヲ挙ゲテ、以テ物ノ通理ニ格レバ、マタニシテ一ナリ。費ニシテ象數アリ、隱ニシテ条理アリ。マタニシテ一ナリ。若シ二ノ一ノ中ニ在ルコトヲ知レバスナハチ錯綜變化シテ為スベカラザル者無シ。神明ニアラザルヨリ至理ヲ析キ難シ。

(四行五行)

と、氣の効用を述べていた。^⑭それが、生成・變化を「二ニシテ一」「一ニシテ二」と説く「水火の用」、氣態の「氣」

と固態の「形」による作用であつた。

水火二行説は、儒教の陰陽五行と西学の火・土・水・気四元素説による四行論を氣の世界において融合させて説かれたものであつた。四元素四行は利瑪竇による『四行論略』で説かれていたが、さらに方以智、游藝らによって、地の世界の五行が水火（と土）あるいは水・金と火・木に分割され、形と氣による水火二行説が形成されたのである。そして、『物理小識』『天経或問』において、地における物の変化・生成が説かれたのであつた。

尾藤二洲の思想世界では、地の世界である地球は水火二行の質的作用によって形成された世界であつたが、天は日月自然の、地は「水火の用」によって形成された世界であつた。天地の世界とは自然の世界であつたのであり、そこでは天人合一思想の三才が、『天と地人』から『天地と人』の構成へ、自然と人間とは一体の構成へと変容しているのである。そこに水火二行の「日本朱子学」の思想世界の成立をみるのできるのである。

ところで、『物理小識』は儒教と仏教と西学を融合した明末清初の思想世界のなかにあり、『天経或問』は儒教と西学を融合させた思想世界にあつた。その意味で、尾藤二

洲をはじめ水火二行説を説いた寛政期以降の「日本朱子学」は、同じく朱子学に西学を融合した思想世界にあると位置づけられよう。

なお、『物理小識』『天経或問』は大量に舶載され流布してはいた。天文曆算家であつた西川如見は、『天文義論』において「命理の天」と「形氣の天」を「戎蛮ノ天学」とともに紹介している。西川正休の『天経或問』の仮名交じりの解説書『大略天学名目鈔』では、五行説と四元論の比較がみられた。^{①②}

しかし、水火二行説はとりあげられておらず、その意味で、水火二行説が日本の儒学者に与えた思想上の意味については再考の余地がある。幕末には朱子学者大橋訥庵が『關邪小言』において、形氣論と水と火が洋学批判の基準であると論じているのである。^{①②}

西洋ノ学ト云モノ（中略）火ハ尖ナルガ故ニ炎上シ、水ハ圓ナルガ故ニ下ニ就クナド、新關ノ説ヲ銜燿スル氏、燃ル物ハ火ニ限り、流ル、物ハ水ニ限りテ、万古一ナル所以ニ於テハ、惘乎トシテ悟レルナシ、コハ唯自力ニ拘局シテ、心ノ妙用ヲ竭スナク、顕微鏡ニテ見ユル所

ヲ、極致ト思フヲ以テノミ。

故ニ、彼レヲガ論スル所ハ、蠶絲牛毛ヲ剖ニ似タルモ、畢竟形氣ノ末ノミニテ、絶エテ理ニハ干渉セズ（後略）。

三 理の世界

朱子学者尾藤二洲の懐いた氣の世界は、『天地と人』という天人合一思想の世界であつた。では、その氣の世界と結合し内在した理はいかに捉えられ、形成された世界はいかなる世界であつたのか。そこには、いかなる特色をもつた世界が構想されてきたのであろうか。

未だ天地有らざるの先、畢竟是れ此の理有り。所謂理とは只是れ天地万物の理、物有りて混成し天地に先んずるの謂に非ず。（一条）

此の理有れば、すなはち此の氣有り。理は只是れ此の氣の然る所以なり。（二一条）

一動一静、皆其の然る所以の理有り。此れ即ち太極なり。譬えば起坐の如し。必ず先ず起る所以の理有りて後起る。必ず先ず坐する所以の理有りて後坐す。理は

只是れ此の然る所以を指す。是れ此の平常茶飯の語、衆人は皆曉得すべく、学ぶ者は却りて通ぜず。乃ち必ず一物を認め以て理と爲す。何ぞや。（三一条）

太極は陰陽の理。太極は是れ陰陽の先に在らず。然れども氣の動静は、未だ其の然る所以無くして然る者有らず。此れ其の前後を言わざるを得ざる所以なり。（四一条）

「理」は、氣の世界を理氣不可分な、あるべきようにあらしめている規範、個物を個物たらしめる原理、「所当然の理」であつたが、さらに、何よりも「太極」、宇宙、万物の根柢である「所以然の理」の深みで捉えられる存在であつた。理先氣後の形而下の世界の成立根柢をなす存在であつたのである。ここにみられるように、二洲においては何よりも「太極」が重視されたのである。

異学の盛行する氣の世界が理の世界を圧倒し、氣のみが横溢する社会と人間は二洲に、二洲の朱子学思想に深刻な危機意識を懐かせたのである。そして、そのことが「太極」の理に裏付けられた経世済民の朱子学を生み、正学化の実現後はさらなる「日本朱子学」の実践へ向かわせることとなつたのである。

ところで、その際二洲に注目されたのが、清朝の体制教
学朱子学であろう。朱子学正学化後の思想世界へ向けたま
なざしを、二洲は『折言』の最後にかく述べている。

余少き時頗る博古を喜ぶ。既に又虚遠の説を喜ぶ。老
後はやや平実の説に嚮かう。近年、張楊園文集なるもの
を読む。益々往日の非を覚う。楊園の説を為す。平々実々、
絶えて浮虚の習無し。真に是れ聖門の学なり。

(一一二条)

張楊園とは、明末清初の在野の地方士人である。張楊園
は『楊園先生全集』におさめた「備忘録」において

吾人日用力を致すに、只だ物の理を窮め致し、事に精
察し、而してこれを力行するを要す。即ひ必ずしも未究
の中を言はざるも、而れども未究の中在らざることなし。
世儒好んで本体を説けども、豈に知らんや、本体は修為
に仮らずして、人人具有す。説き得て精微広大ならしむ
と雖も、何ぞ日用に益あらん。

と述べ、「未究の中」を重視して日用の益を求めた経世濟
民の朱子学の姿を説いている。⁽¹⁸⁾それは、二洲の「浮虚の習」
に対する「聖門の学」との評に繋がる。

異学批判以来の二洲の明末清初思想へのまなざしは、「今
を距ること十余歳、書肆^{（19）}偶三角堂集なる者一帙を携え来
たりて余に示す。余取りてこれを覽る。清の人陸稼書の文
なり。其の学は醇正にして、絶えて近世の浮虚の習に似ず。
後挙げて以てこれを諸友に語る。」（「學術弁序」⁽¹⁹⁾）と陸稼書
にも及ぶ。「學術弁」の王学批判への評だが、陸稼書は天文・
曆学に通じ、西学に通じた天文・数学者梅文鼎らとの交友
でも知られる。

理の世界における朱子学防衛、そして氣の世界における
水火二行の受容という明末清初思想に向けられたまなざし
は、寛政期の朱子学者に西洋への関心をももたらしたかも
知れないのである。それは先の、氣の世界における「国体」
の読み出しにも連なるであろう。

では、理の世界の三才一貫の理はいかなる特色をもった
のであろうか。天と人の世界の理は、いかに捉えられたの
であらうか。

天は自然の理を有し而して違ふこと能はず。故に春の或いは寒、暖終にこれに勝つ。秋の或いは熱、涼終にこれに勝つ。人は自然の理を有し而して違ふこと能はず。聖人の政もまた自然の理に従うに過ぎず。故に子而して不孝なれば、刑は必ずこれに従う。臣而して不忠なれば、誅は必ずこれに従う。是れ理なり。古今に亘り而して變ぜざるものなり。華夷に通じ而して局らざるものなり。此れに由りこれを推す。物はこれ皆天理有り。而して得てして違ふべからず。知るべきなり。夫子は嘗て烝民の詩を釈して曰く、物有れば必ず則有り。一に必ず字を加え、其の有らざる所なきことを見る。学者はまさに黙識すべし。

(五七条)

ここでいう「自然の理」とは所以然の理を、「理」は人の世界の所当然の理を指し示している。天も人も同じくその存在の根拠である「自然の理」は有しており、それには天も人も反することはできないのである。人の世界の聖人の政治においてもである。だから、子の不孝には刑罰、家臣の不忠には誅罰というのは道理である。それは古今不変で、華と夷の区別もないものであった。考えてみれば万物

には太極たる天理があるが、その存在の規範もあるのである。

ところで、朱子学では人の世界には「蓋し忠孝一理、能く君に忠なるは乃ち孝を為す所以なり」(『真文忠公文集』卷三〇、問父母惟疾之憂²⁰)と、「忠孝」の理が語られていた。二洲の朱子学においては天人相互の関連はなく、太極の理は存在しつつも、天から離れた人の世界・社会における忠孝の理が語られた。

忠を説けばすなはち忠、孝を説けばすなはち孝。皆是れ寔に理。此を外して所謂真なる者を求むるは、吾儒の学に非ざるなり。

(八四条)

徂來は云う、理は定準無き者、然るか否。曰く、臣をなすは忠、子をなすは孝。豈に定準に非ざらんや。手の容は恭しく、足の容は重し。豈に定準に非ざらんや。乃ち零細なる事物に至る。其れ定準あるは、推して知るべきなり。曰く、理を以てこれを推す。徂來は以て宋儒学と為す。子乃ちこれを習う。宜^{はた}ど其の説は相入れざるなり。曰く、吾は事物は皆定準有り、稱は之れ星有り、尺は之れ寸有るを知るのみ。彼は無星之稱無寸之尺を以て、

而して長短輕重を度る。宜乎、其の定準有るを見ざるなり。たふさか
り。
(一〇四條)

客曰う。理は定準無し。忠孝を指すの謂いに非ず。忠孝これ定準を為すは、渠かれ又異論無し。所謂理なる者は懸空心を以て料度し以て理と為す者を指す。曰く。吾れ且つ其の昭然なる者を挙げてこれを言うのみ。昭著なる者は既に準有り。細微なる者は豈に準無きか。此れを以てこれを推せば、大小高下、皆な是れ此の如し。子はまた何をか疑わん。
(一〇七條)

以上から注目すべきは、忠孝道德が武家の理として捉えられているが、それがさらに「定準」とされていることであろう。二洲の懐く朱子学、さらに「日本朱子学」においては、忠孝道德が武家社会の「定準」とされたのである。それは、理 \parallel 忠孝の教育が武家社会への「日本朱子学」の浸透を図るものであり、朱子学正学化後の昌平費における「修己治人」、武士教育の理念となるものであったのである。

またそれは、内憂外患問題をかかえつつある儒教的世界の中の「日本朱子学」からする新世界への対応の一端であった。

たのかもしれない。

かかる幕府の武士教育の理念の下、さらに水戸藩の武士教育においては忠孝一致の道德理念が打ち出されたのである。

おわりに

以上、尾藤二洲の懐いた朱子学の理気二元の思想世界をとらえてみた。

そこには、氣の世界における《天地と人》という自然と人の世界を分離して捉える新たな「天人合一」の構想に基づいた天人合一思想があり、そのなかの地の世界では、水火二行の質による物の生成が構想された。

さらに理の思想世界では、太極を背景に、朱子学の「忠孝」の理を武家社会の「定準」として社会に定着させようとするのが尾藤二洲の構想であり、「日本朱子学」の思想世界であったのである。

寛政期には忠孝道德に基づく武家社会の朱子学が成立したのである。理に代わる忠孝が武家社会の定準であり、氣の世界では「西洋」との折衷、そして徳川日本の忠孝とい

う「修己」。以上が寛政からの「徳川日本」であった。

普遍的な自然界と人間社会の「日本」の固有性、それを覆う太極。これが尾藤二洲の思想世界であったのである。

そして、武士の対外危機意識が「治人」において、忠孝の国家構想となっていたのである。対外危機の下会沢正志斎は、死後の安心をも説く宗教性の強い国体論を説いたのである。

【註】

(1) 寛政正学派を近世儒学思想史上に位置付ける先行研究に、衣笠安喜『近世儒学思想史の研究』（法政大学出版局、一九七六年）、辻本雅史『近世教育思想史の研究―日本における「公教育」思想の源流―』（思文閣出版、一九九〇年）、幕末儒学史の起点に位置付けた宮城公子『幕末期の思想と習俗』（ベリかん社、二〇〇四年）がある。

(2) 尾藤二洲の思想についての研究としては、人物論に頼惟勤『尾藤二洲について』（日本思想大系37「徂徠学派」岩波書店、一九七二年）がある。研究史上の二洲像としては、頼祺一「尾藤二洲の思想―明和・安永期の朱子学―」（『史学研究』一〇二、一九六七年一〇月）、同『近世後期朱子学派の研究』（溪水社、一九八六年）が異学の禁前の思想を扱い、幕末時代の歴史意識の特質などを扱うものに、梅澤

秀夫「称謂と正名」（『日本近世史論叢』下、吉川弘文館、一九八四年）、中村安宏「尾藤二洲の天皇観・皇統意識―（『フィロソフィア・イワテ』32、二〇〇〇年一月）がある。また、思想を思想史上に位置づけて論じるものに宮城公子「幕末朱子学の性格」（『四天王寺女子大学紀要』12、一九八〇年三月）、荻生茂博「異学の禁から幕末陽明学へ―「自得」、知の在り方をめぐって」（『日本学』11、一九八八年七月）がある。

(3) 『斥言』（『日本儒林叢書』一、鳳出版、一九七八年、一―一五頁、原漢文）。以下、『斥言』の引用はこれによる。

(4) 山井湧『明清思想史の研究』（東京大学出版会、一九八〇年）、同「清代の朱子学」（有田和夫・大島晃編『朱子学的思维―中国思想史における伝統と革新』汲古書院、一九九〇年）、岡田武彦『中国思想における理想と現実』（木耳社、一九八三年）参照。

(5) 後藤基巳『明清思想とキリスト教』（研文出版、一九七九年）、岡本さえ「『気』―中西思想交流の一点―」（『東洋文化』67、東京大学東洋文化研究所、一九八七年三月）など参照。
(6) 方以智の思想については、坂出祥伸『中国思想研究 醫藥養生・科學思想篇』（関西大学出版部、一九九九年）第三部、小川晴久「方以智の自然哲学「通幾」とその構造―三浦梅園の条理学との関連で―」（『研究紀要』四 学習院高等科、一九六六年）など参照。

(7) 海老沢有道『南蛮学統の研究―近代日本文化の系譜―』（創

文社、一九五八年、増補版一九七八年）など参照。

- (8) 吉田忠『天経或問』の受容（日本科学史学会編『科学史研究』Ⅱ、二四、岩波書店、一九八六年二月）、劉岸偉「西学（Western Studies）をめぐる中日両国の近世—方以智の場合—」（札幌大学教養部紀要）三七、三九、一九九〇年一〇月・一九九一年一〇月）など参照。
- (9) 『冬読書余』（日本備林叢書）二、七〇―八頁、原漢文。以下、『冬読書余』の引用はこれによる。

- (10) 杉本勲『近世実学史の研究』（吉川弘文館、一九六二年）各説第一章ほか参照。

- (11) 『素餐録』（日本思想大系37『徂徠学派』、岩波書店、一九七二年、二五―二頁）。

- (12) 『物理小識』（王雲五主編、国学基本叢書四百種『物理小識』上、臺灣商務股份有限公司、中華民國五十七年、一〇―二頁、原漢文）。

- (13) 『天経或問』（西川如見遺書）第十編、西川忠亮、一九〇〇年）二一九―三十一丁、原漢文。

- (14) 『天主八万物ヲ寰宇ニ創作ス。先ズ渾沌四行ヲ造リ、然ル後其ノ情勢ニ因リテコレヲ本処ニ布ク。火ノ情ハ輕ケレバ、スナハチ九重天ノ下ニ躋リテ止マル。土ノ情ハ重ケレバ、スナハチ凝リテ天地ノ當中ニ安ズ。水ノ情ハ土ニ比シテ輕ケレバ、スナハチ土ノ上ニ浮キテ息ム。氣ノ情ハ輕カラズ重カラザレバ、スナハチ水土ニ乘リテ火ヲ負ウ。所謂土ハ四行ノ濁渣ヲ為シ、火ハ四行ノ淨精ヲ為スナリ。火ハ其

ノ本処在リテ天ニ近ケレバ、スナハチ随ヒテ環動シ、毎偕二一週ヲ作ス。此レ元火ニ係ワレリ。故ニ極メテ淨ク甚ダ炎ニシテ光無シ。（中略）天下万象ノ始メハ、皆四行ヲ以テ形ヲ結ブ。（後略）（利瑪竇『四行論略』、原漢文。全文は鮎沢信太郎『地理学史の研究』（愛日書院、一九四八年、復刻版原書房、一九八〇年）に掲載）。

- (15) 『天文義論』（西川如見遺書）第二編、西川忠亮、一八九七年）。
- (16) 『大略天学名目鈔』（西川如見遺書）第十一編、西川忠亮、一八九八年）一―七丁）。

- (17) 『關邪小言』（明治文化研究会編『明治文化全集』第二十三卷 思想篇、日本評論社、一九二九年、所収、八九頁）。

- (18) 『備忘録』（朱子学大系第十一卷『朱子の後継（下）』、明德出版社、一九七八年、所収、一六一頁）。なお、『備忘録』は、一八三六（天保七）、七年に四分冊で刊行されている。

- (19) 『學術弁序』（近世儒家文集集成10『静寄軒集』、ぺりかん社、一九九一年、所収、一三七頁、原漢文）。

- (20) 溝口雄三・丸山松幸・池田知久編『中国思想文化事典』（東京大学出版会、二〇〇一年）、二二三頁）。